

## 第八話 谷沢永一流 蔵書処分術

### ●阪神淡路大震災、谷沢邸の書庫は？

何か、ことが起きたら、まずおしまいだ。その「こと」が谷沢永一宅を襲った。平成7年（1995）1月17日、阪神・淡路を直撃した震度7の大震災である。死者約6500名、全壊家屋約10万5000棟、焼失した住宅も6000棟を超えた。高速道路がねじまがり、崩落し、町を焼き尽くす業火の上げる黒煙が、空を覆った。「戦争を知らない子供たち」である私にとって、それは日常が一瞬にして非日常に変わる、畏怖すべき光景だった。

『雑書放蕩記』（新潮社）巻末「さてそののち——後記に代えて」に、蒐書60年、蔵書13万余冊の蔵書家が被災した体験を綴っている。

「幸いに我が家は改築の直後だったので、家屋の損傷は免れたが、書庫の災害は無惨であった。二階の最も古い部分は書棚がすべて将棋倒しになり、本は悉く吐きだされて散乱している。隣接するより新しい部分は書棚が多少ゆがみつつ立っているかわりに、本が洩れなく棚から飛びだして床に堆く積もり重なっている。階段を上ったところにある縦長の書棚は下まで一直線に転がり落ちた。一階の書庫は揺れが少なかったせいか、本がかなり書棚に残っているものの、その本を載せたままの書棚がねじれながら四十度ほど傾いている。いずれにせよ踏みこむこともできない危険にして乱雑きわまる打撃である。余震がまだまだ続いているので、当分は手を着けず、放っておくしかないであろう」

6000人超の死者を前に、本のことなど二の次、三の次で、惨事の直後には、とても語れる空気ではないことは、今回の東日本大震災でもわかった。それだけに、谷沢のこの記録は貴重である。

箆筒には引き出しがある。食器棚にはガラス戸がはまっている。書棚にはそれがない。すべて剥き出しである。もちろん、一部、ガラス戸、開き戸のついた、ご大層な書棚があるにはあるが、それは、蔵書量の少ない、少量の蔵書でがまんできる人が、大切に本を保管するためのものだ、2万冊、3万冊と本が増えたら、いちいち、そんな手間のかかる上に高価な書棚はバカバカしくて使えない。簡素で、実用本位な、既製の本棚に並べるしかない。これらは、基本的には垂直の板に水平の棚を渡しているだけで、地震が起きた場合に飛び出し防止のストッパーなどついてない。壁に近い面にはついている。あたりまえだ。本を並べるとき、わずか数センチのストッパー、あるいは背板がなければ、本は均等に並ばない。

既製の、たとえばコクヨや丸善の本棚は、強い揺れがあった場合、本が飛び出すかどうかまで、配慮していない。地震にはきわめて弱い、とっていい。谷沢家の書庫にある本棚は、いかに効率よく、棚にさまざまなサイズの本が並ぶかは考えられていたが、地震対策はほとんどなされていなかったようだ。そもそも、1995年1月17日のその日まで、阪

神間に、そのような歴史的な大地震が起きるとは、想定する者は少なかった。

谷沢は「一階の書庫は揺れが少なかった」と書いているが、1階と2階では、被害の差が段違い、というのも教訓になった。高層マンションの最上階となれば、揺れは倍加する。とくに、耐震構造というのがくせもので、わざと上の階は柔軟に揺らすことで、建物のダメージを防ぐように設計されている。同じ震度であっても、1階と10階とでは、まるで違うのだ。少なくとも蔵書家は、マンションに住む場合、単純に見晴らしがいい、家賃が安いからと、上の方の階を選ぶべきではない。

私の知り合いにも蔵書家は多いが、都内に住む2人の東日本大震災体験を聞いてみた。Aはアパート2階に足の踏み場もないほど、本が充満した仕事場を持っているが、やはり本は書棚から飛び出した。書棚も歪んだようだ。Bはマンションの7階。さすがにかなり揺れたようで、書棚2本が倒れ、使い物にならなくなったという。

### ●打撃を受けた書庫の回復

前回も書いたが、私の書斎も書棚こそ倒れなかったものの、積んである本、本棚の上部に置いた本などは床に散乱した。落葉のように降り積もった床はいまだそのまま、本を踏んで歩いている。おかげで、本がいく冊も壊れた。歪んだり、函が壊れたり、表紙が破れたり、無惨な姿をさらしている。本は踏むものではない。

せめて歩いて通れるだけのスペースを空ければいい、と言われればその通りだが、そのためには、一時しのぎではダメで、もっと根本的な蔵書環境の改善が必要になってくる。これがなかなか難しい。

谷沢はどうか。先の惨状を「産経新聞」に書いたところ、司馬遼太郎が速達で見舞いと書庫の後始末について適切な処置を書いてくれた。

書庫の大混乱は「いのちを掻きまわされたようなものでしょう」と、蔵書家の心底を見通した心情あふれる挨拶に始まり、いったんは他人の手を借りて修復し、暖かくなってから、自らの手で整理を「気永になさればどうでしょう」ということだった。この「至れり尽くせりの御配慮」をありがたく受け止め、大工を手配し、修復を人任せにした。

「たちどころに傾いた書棚が起こされ、倒潰した書棚の解体処分が進む」。書庫に本を入れるのもお願いし、「一日で本が立ち並んだのには感動した」と書いている。そこで、13万冊の蔵書を、もとのように並べるのは無理と判断、「蔵書の縮小」を決意する。

私が知り合いの古本屋さんから聞いたところでは、三・一一以後、東京でも客からの買い取りが一举に増えたという。おそらく、書棚が倒れるなど、蔵書家ならではの被害に遭った方だろう。平常ならうっとり眺める書棚の列も、いったん異変あらば、凶器と変貌する。家人にも「何とかしててくださいよ。家がつぶれます」などと嫌みを言われ続けても、一冊一冊、気持ちを込めて集めてきた蔵書への思いは、簡単に断ち切れるものではない。

それが地震という、外部からの暴力的な攻撃により、思いを断ち切る（目が覚める）き

っかけとなる。谷沢もそうだった。「或る本が書庫のどこかにある筈だ、というていたらくでは持っていないに等しい。蔵書のイノチは分類である」と肝に据え、古書界への放出を決心する。

蔵書処分を依頼した先は、京都の老舗古書店「赤尾照文堂」。河原町通り商店街の三条と四条のちょうど中ほどにある。「国文学を中心とする最も本格的で引き締まった店構え」と谷沢が書くとおり、表通りに面した入口脇のガラス越しに、文学全集が積み上げられるのが見え、店内に入るのにも独特な緊張感がある店だった。いま「だった」と書いたのは、谷沢が評する店構えは今はなく、2006年に店は改築。一階が「ちりめん和雑貨」を商う「かざり屋」と名を改め、赤尾照文堂は2階へもち上がった。国文学を中心に、整然と良書が棚を埋めつくす姿は消え、古版画や刷り物を中心とするギャラリーふうの店に変わってしまった。

京都で学生時代を送った私としては、そうひんぱんに買うというわけではなかったが、河原町通りへ出たときは、必ず赤尾さんに立寄り、しばらく日本文学の棚の前にたたずんで、書物との対話を楽しんだものだった。そのことを思い出すと、ちょっと淋しい気持ちができる。

### ●古本屋さんは何を思っ縛る

まあ、それは別の話。平成7年、地震があった1月17日からほぼ一カ月後の「二月十一日を皮切りに合計四回、殆ど朝九時から夕方までの大活躍」により、赤尾照文堂による蔵書整理大プロジェクトが始まった。その処分風景は、こう描かれている。

「さあ始めましょうと、私が本棚から放出すべき書物を抜きとってゆく。倒壊後に棚へ闇雲に戻した儘だから順序も分類もあったものではない。それを赤尾さんが頭のなかで整理しながら、おおよその仕分けをして床のあちこちに並べ、或る程度のまとまりがついたところで紐にかけける。私はどうしても立ったりしゃがんだり、左右に体をねじったりするものだから、腰が痛いといひたりこむが、常日頃から鍛えてある赤尾さんは憎らしいほど平気である」

段ボール数箱に収まる小処分なら、まずは、どんどん書棚から本を出して、箱に収めるだけの作業だが、数千冊、数万冊といった規模になると、古本屋さん側の作業工程もまるで違ってくる。谷沢家から放出された蔵書は、2屯トラック3台分になったという。

私も数千冊の蔵書処分は、過去に4、5回経験があるので、古本屋さんがいかに本を縛っていくかは、つぶさに見ている。蔵書30冊くらいを一単位にして、紐で縛っていくのだが、その際、ただ単純に目の前の本を積み重ねて縛るわけではない。

これは、古本屋さんにとって、客から買ってきた本を店（あるいは倉庫）に持ち帰った後が重要なのだ。業者としての段取りの問題になるが、たとえば、大別して、店の棚へすぐ補充すべき本、業者市で処分する本、倉庫でしばらく寝かせる本と、瞬時に判断して縛

っていくのだ。「おおよその仕分けをして床のあちこちに並べ」と谷沢が見て取った作業とは、そのためだ。もちろん、同じ作家のものを固めたり、ジャンル別に固めるということもあろうが、客の側からは見えない、業者独自の判断基準で分類されていく。

### ●なにを残し、なにを売る

ところで、処分するにあたって、谷沢はどういう基準で残す本と売る本を決めたか。このとき、谷沢は65歳になっていた。長らく務めた関西大学も、61歳のとき、退職していた。そんな執筆者として置かれた立場も、蔵書処分に影響してくる。

「若い時に名著だという触れこみに釣られて買った本が、軒並み殆ど私の役に立たなかったようである」。手許に残したのは「超一流の学者の著述」。ただし「二流以下をもし読み漁らなかつたら、ひょっとすると超一流を超一流と認めることができなかつたかもしれない」と言う。さすが蒐書60年、脳に本のタコができるほど、書物の大海を泳いできた人物ならではの、含蓄あることばだ。

さらに谷沢流名著見極め術として興味深いのは、「外装のいかめしくない気易くしとやかな類いの本に、有益なヒントが沈められている」と指摘していること。そこで例として挙げられているのが、「サントリークォーターリー」という雑誌に掲載された淀川長治の談話である。

談話の中で淀川は谷崎と三島を比べ、三島は「論文的に、大学の教室的にうまい」だけで、谷崎に比べたら「子供」と斬って捨てている。この谷崎・三島比較論を、談話の一部ながら「これは何物にも煩わされず何物にも気兼ねせず自分の眼を光らせている人の発言」として重んじる。

世に喧伝される谷崎潤一郎の名著と言われる立派な本はさっさと処分し、「サントリークォーターリー」は残した。この一言のためだろうか。